



四国連絡特急殺人事件

西村京太郎

し こくれんらくとつ けうきつじん じ けん
四国連絡特急殺人事件

にしむら けいたろう
西村京太郎

© Kyotaro Nishimura 1985

1985年4月15日第1刷発行

1989年5月15日第17刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——大日本印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183485-1



講談社文庫

四国連絡特急殺人事件

西村京太郎

講談社

目次

遍路の春

東京本店

第二の標的

凶器のネクタイ

スケッチ・ブック

羽田空港

特急「南風1号」

アリバイ

政敵

大阪

5

26

47

67

88

109

136

149

165

192

美少女

影の男

父と子

一枚の写真

総選挙

壁に挑む

黒幕

捜査会議

幕が下りて

解説

三橋アキラ

394 370 353 324 314 295 275 256 243 221

遍路の春

四国の春は、お遍路の姿が始まる。

菜の花が風にゆれるその向こうを、菅笠すががさ姿のお遍路が歩いて行くのは、一つの絵である。

今年の春先は、例年になく雨の日が続き、寒い日が多かったが、三月も中旬になると、ようやく、水もぬるんできた。

三月二十一日は、弘法大師の命日である。

この日を中心に、四国遍路は、最盛期を迎える。

大師の命日と重なった日曜日は、朝から快晴で、いかにも春らしい一日になった。

四国第七十番札所ふだしよの本山寺もとやまも、朝から、お遍路の姿で賑わっていた。

本山寺は、予讃本線の本山駅から一キロのところにある。大同二年に、弘法大師が建てたといわれる本堂は、国宝になっているが、それ以上に、五重塔が有名だった。

この五重塔は、遠くからも見え、疲れたお遍路にとって、無言の励ましになるからである。

寺の境内には、茶店があり、お遍路たちは、ここで、湯茶の接待を受けて、次の札所へ向かっ

て行く。

東京からやって来た金子夫婦も、ここで、ゆっくりと、のどをうるおした。

夫の金子は、去年定年を迎え、前々からの念願であった四国遍路に、妻の文子を連れてやって来たのである。

二人の娘も、すでに結婚していて、その方の悩みもない。

旅なれていない文子のことを考えて、休息は、十分にとった。バスに乗って、八十八カ所を一週間ぐらいで回る観光会社で作ったコースもあるらしいが、金子は、一カ月でも、二カ月でもいいから、歩いてゆっくり回るつもりだった。

「そろそろ、出かけようか」

と、金子は、文子を促して、茶店を出た。

眠くなるような暖かさである。

杖をつき、二人は、並んで歩いて行く。

第一番札所の鳴門の靈山寺に参詣した時には、杖のつき方もぎこちなかったものだが、今は、歩き方も、どうにか、さまになってきている。

道の右側に、黄色の花が咲き乱れていた。菜の花畠である。

「あらッ」

と、文子が、急に、声をあげて立ち止まった。

「どうしたんだ？」

「あそこに、人が倒れていますよ。お父さん」

と、文子が、菜の花畠の一角を指さした。

風にゆれている花の間に、遍路姿の人間が倒れているのが見えた。

「急病でも起こしたのかな？」

と、眩きながら、金子は、菜の花畠に入って行ったが、二、三メートルまで近づいて、

「あッ」と、立ちすくんだ。

俯せに倒れた背中のあたりが、血で、真っ赤に染まっていたのだ。

金子の背後で、妻の文子も、声もなく立ちすくんでいる。

金子と同じ六十歳ぐらいの老人だった。

菅笠が外れ、うすくなった頭髮が、むき出しになっている。杖は、離れた場所に落ちていた。

「死んでるんですか？ お父さん」

文子が、ふるえる声で聞いた。

「どうかな」

金子は、勇気を出して、相手の傍に屈み込んだ。

強烈な血の匂いがした。

「しっかりして下さい」

と、声をかけ、肩のあたりをゆすってみたが、相手は、ぴくりとも動かない。

「死んでるな」

「どうしたらいいんです？」

「とにかく、警察に知らせなきゃな」

金子は、かすれた声でいい、文子と、本山寺に引き返した。

本山寺からの連絡で、警官が、自転車で駆けつけて来た。

電話が、ただお遍路の老人が死んでいるというだけだったので、病死だろうぐらいに思っ、派出所の巡査がやって来たのである。

しかし、背中を刺されて殺されたとわかって、今度は、香川県警の刑事や、鑑識が、パトカーを飛ばして来た。

平和な菜の花畠は、いかめしい顔つきの捜査一課の刑事や、「鑑識」の腕章をつけた男たちで一杯になった。

通りかかったお遍路も、遠くから見守っている。

「お遍路が殺されるなんて、何てことだ」

捜査一課の白石警部が、ぶぜんとした顔でいった。

「それも、老人です」

と、部下の原田刑事がいった。

背中を、三カ所も刺されていたが、死体を、仰向けあおむけにすると、左胸のあたりも一カ所刺されているのがわかった。

菜の花畠の、かなりの範囲が踏み荒され、血痕が飛び散っている。

犯人は、恐らく、まず胸を刺し、逃げる被害者を追いかけて、背中を三度刺して殺したのだらう。

財布は無事で、二十万円近い金が入っていた。スイス製の高価な腕時計も失ってはいない。物盗りの犯行ではないようだった。

白石は、菅笠を外して、裏を見た。同行二人の文字の横に、「泥魚」と書いてあった。

「泥の魚って、何のことです？」

原田が、のぞき込んできいた。

「恐らく、俳号か何かだろうね」

と、俳句をやる白石はいった。が、泥魚という俳人に心当たりはなかった。

怨恨からの殺人だとすれば、何よりも急がなければならないのは、被害者の身許の確認だった。

十九万六千円の所持金、五、六十万円はすると思われるスイス製腕時計。

この二つを見る限り、かなり裕福な老人のように思える。

しかし、身体はどこを探しても、身許を証明するようなものは、発見できなかった。

身分証明書も、名刺も、運転免許証も、CDカードも見つからない。

わずかに、手掛りになりそうなのは、笠に書かれた「泥魚」という文字だが、これが、白石の考えるように、俳号だとしても、これだけでは、どこの誰なのか、わかりそうもなかった。

「身長百六十五センチ。体重五十七、八キロといったところかな」

と、白石は、死体を見下しながら、呟いた。

「年齢は六十歳くらいでしょうか」

原田が、いう。

「そんなところだな。力仕事をしていた手じゃないね。サラリーマンでいえば、管理職だろう。だが、妙だな」

「何がですか？」

「なぜ、身につけていないんだろう？」

「名刺や、CDカードの類なら、お遍路に出るんで、わざと身につけて来なかったのかも知れません。或いは、犯人が、被害者の身許をかくそうとして、持ち去ったんでしょう」

原田が、したり顔でいうのへ、白石は、首を振って、

「そんなものじゃない」

「他に何かありますか？」

「よく見たまえ。この仏さんは、お遍路の格好をしてるじゃないか」

「それは、よくわかっていますが」

「いいかね。本山寺は、第七十番の札所なんだ」

「この近くの生まれなので、よくわかっておりますが」

「ということは、この仏さんは、すでに各所の札所を回って来たことになる。少なくとも、本山寺には参詣した筈だ。それなら、当然、各札所で、お札をもらっていないきやおかしい。お遍路

は、各寺で参詣したという証明のお札お札を受けるのが大きな楽しみなんだからね」

「そうです。お札を持っていないのはおかしいですね」

「まさか、お札を犯人が持ち去ったりはせんだろう。そんなことをしても、何にもならんからね」

「とすると、各寺が発行するお札が見当たらないのは、どういうことなのでしょう？」

「一つだけ考えられることがあるよ」と、白石がいった。

「それは、この仏さんに、誰か連れがいて、お札は、その人間が持っているということさ」

白石は、老人の死体が、解剖のために運ばれて行くのを見送ってから、原田刑事と、本山寺へ歩いて行った。

現場の菜の花畠から本山寺まで約八百メートル。歩いて十二、三分の距離である。

本山寺には、お札お札を受けた遍路が、記帳するノートが用意されていた。

今日、三月二十一日のところには、まだ、午前十一時を回ったばかりだが、すでに、二十七名の名前が記帳されている。

だが、その中に、「泥魚」の文字はなかった。

前日、二十日のページをあけてみた。

あった。

最後の方に、筆太の字で、次のように書いてあった。

東京 泥魚他一名

やはり、被害者には、連れがあつたのだ。

白石は、寺の人に、この泥魚と記帳した老人を覚えていないか、きいてみた。

「菜の花畠で殺されていたというご老人でしょう」と、相手は、肯いた。

「私が、お札を差しあげましたから、よく覚えていますよ」

「ここへ来たのは、昨日の午後五時近くでしたよ。もう薄暗くなりかけていましたね」

「他一人と書いてありますが、どんな人が一緒だったか、覚えていますか？」

「ええ。若い娘さんでしたよ。同じように、お遍路さんの姿をなさっていましたから、あの方の

お嬢さんじゃないですかね。親娘のお遍路というのも、よく見うけますから」

「老人と何か話をしましたか？」

「泥魚と記帳されましたんでね。面白いお名前ですねと申しあげたんです」

「それで、老人は、何といました？」

「これは、俳号だといわれました」

「やっぱり、俳号ですか」

「小さなスケッチ・ブックを持っておられましてね。何枚か、絵を見せて頂きました。なかなか個性的なスケッチでしたね」

「スケッチ・ブックなんか、現場に落ちていませんでしたよ」

「私は、ちゃんと見ましたよ。鳴門の渦潮や、第一札所の靈山寺のスケッチをね」

「どんなスケッチ・ブックでした？」

「普通の雑誌くらいの大きさでしたね。かなり厚いものです」

「一緒にいた女性の方ですが、顔は覚えていらっしゃいますか？」

「もう薄暗くなっていましたしね。それに、女の方は、笠をとられなかったんで、顔は、よくわかりませんでした。背は、女性としては高い方でしたよ。老人と同じぐらいじゃなかったかな」

その背の高い女が、連れの老人を殺したのだろうか？

遺体の解剖は、香川県立衛生研究所で行われる。
結果が出るのは、夕方になるだろう。それに、胸と背中を刺されて殺されたことはわかってい
るから、解剖によって、新しい事件解決の手掛りが出てくる可能性は少ないだろうと、白石は思
っていた。

事件解決のために、やらなければならないことは、いくつもあった。

第一に、被害者の身許確認。

第二に、被害者の連れだった若い女の遍路を見つけ出すこと。

第三に、スケッチ・ブック。これが見つかれば、犯人が、なぜ、高価な腕時計や、所持金を持
ち去らず、スケッチ・ブックだけを持ち去ったかわかるだろう。

「被害者だがね」

と、白石は、本山寺を出ながら、原田刑事にいった。

「どこかで見た顔のような気がするんだが、君はどうだね？」

「私には、わかりませんが――」

「いや、どこかで見たんだ。そんな気がしてならん」

「ということは、有名人ということですか？」

と、原田は、眼を大きくして、白石を見た。

お遍路の中には、時として、有名人がまじっていることがある。前に国務大臣をつとめた老人がいたこともあるし、元映画スターという老婆もいたことがある。さすがに、現役の有名人は少ないが、二年前には、五歳になる自分の娘が不治の病にかかり、苦しむのを見かねて安楽死させた三十五歳の女性タレントが、執行猶予の判決のあと、お遍路に来たことがあった。

「わからないが、どこかで見たような気がして仕方がないんだ」

白石は、首をかしげながらいった。

被害者に同行していた女の手配も行われた。

ただし、背の高い若い女としかわからないから、捕えるのは骨だろうと、白石は覚悟していた。東京や大阪でなら、お遍路姿は目立つだろうが、ここ四国では、むしろ、かくれ蓑の効果を発揮する。それに、最近、若い娘のお遍路も多くなっていた。都会の娘たちに、お遍路の格好が、一つの風俗として人気があるらしい。

午後三時を過ぎて、一つの報告がもたらされた。

本山寺から、国道十一号線を北へ約一キロ行ったあたりで、お遍路の衣裳が、雑木林の中に捨てられているという知らせだった。

(問題の女のものではないか?)

と、白石は感じて、原田刑事を連れて、パトカーで、現場に向かった。着いたとき、小雨が降り出した。

絹のような細かい雨である。

その雨の中で、近くの派出所の巡査と、発見者の農家の子供二人が、白石たちを待っていてくれた。

道路沿いの小さな雑木林は、子供たちの格好の遊び場になっていた。そこは、小動物の宝庫だったし、かくれんぼや、ターザンの真似をする場所でもあった。

今日も、二人の子供が、この雑木林に入り込んで、投げ捨てられていたお遍路の衣裳を発見したのだという。

「発見したときは、この上に、土がかぶせてあったそうです」

と、派出所の若い巡査が、白石に説明した。

確かに、白い衣裳に、ところどころ、泥がついている。

菅笠も、杖も、脚絆きんぱんも、わらじも一緒に投げ捨ててある。

白石は、菅笠を手に取り、裏側を見た。そこには、持ち主の名前が書いてあるものだが、「同行二人」の文字があっただけだった。

「これは、若い女が着ていたものだな」

と、白石は、原田刑事に小声でいった。